



## みどころ

人間の欲望の中に“自己顕示欲”があることはよく知っていたが、“承認欲求”なるものがあることを、本作ではじめて確認！X (旧 Twitter) にみる、「いいね」の獲得合戦は正にそれ。また、“インフルエンサー”に憧れる若者も全員その塊（かたまり）だ。

そんな時代状況下で生まれた、“ケータイ（スマホ）を持った猿”たちの暴走の1つが「スシロー事件」や「はま寿司事件」だが、“承認欲求”の他に“ミュンヒハウゼン症候群”が加わると、本作のヒロイン・シグネのような“最悪の女”に！？

ロシアの抗不安薬“リデクソール”を飲めば皮膚異常が発生すると聞いたシグネが、それを購入し、大量に飲んだのは一体なぜ？また、皮膚病が顔にまで出てくると、悲しむのではなく「計算通り！」と喜んだのは一体なぜ？

こんなおぞましい映画（？）がなぜ公開されるの？私はそう思うが、問題提起作であることは間違いなし。ヨアキム・トリアー監督の『わたしは最悪。』（21年）は、タイトルとは裏腹に、30女の生きる道を描いた面白い映画だったが、本作のシグネこそまさに、わたしは最悪！

“ケータイ（スマホ）を持った猿”が増殖している昨今、くれぐれも本作のシグネが人気インフルエンサーとなり、第2、第3のシグネが生まれないことを願いたい。

## ■□ケータイ（スマホ）を持った猿の願いは？その暴走は？■□

SNSとは「Social Networking Service（ソーシャルネットワーキングサービス）」の略。ケータイの普及からスマホへの移行、その拡大に伴って、X（旧 Twitter）、Instagram、

TikTok 等々の SNS が普及した。その結果、今や“ケータイ（スマホ）を持った猿”とも言うべき若者たちの一部では、人間と人間との繋がり方の主流が、直接会話から SNS による対話交流に移行している。

そんな中で生まれたのが“インフルエンサー”だ。乃木坂 46 が歌って大ヒットした『インフルエンサー』（17 年）を、私は当初“インフルエンザ”と誤解していたのはお笑い草だが、あなたはインフルエンサーって何か知ってる？そして、その役割とは何かをきちんと知ってる？また、X（旧 Twitter）を利用する人は若い人だけではなく年配者にも増えているが、そこでは「いゝね」をいくつ獲得できるかが競われている。それは動画配信の世界でも同じだ。

そんな時代状況下で起きたのが、スシローにおける、「高校生が醤油の差し口や未使用の湯呑を舐めまわした迷惑行為」や、はま寿司における、「若い男がレーンに流れてくる 2 貫寿司のうち 1 貫を箸で食べる」、「他人が頼んだ寿司にワサビを混入させる」等の迷惑行為（本人はそう思っていないが）が、SNS で拡散されるという、奇妙な（末期的な）事件だ。彼らは、一体何を目的にそんな行為をしたの？もちろん、“ケータイ（スマホ）を持った猿”には、そんな行為が人間社会の刑法における威力業務妨害罪や民法上の不法行為に該当するため、刑罰の対象や損害賠償の対象になることは分かっているだろう。

## ■□■スマホデビューした私のスマホ活用術は？■□■

私は長い間、ケータイは重宝していたが、スマホは不要と考えていた。ところが、2021 年 9 月に“スマホデビュー”を果たし、以降、LINE や WeChat、Weibo（微博）等の機能を使っている。また、Weibo で自分のサイトを作り、ちょっとした出来事や自分の意見を発信していると、それも習慣になってきた。

未だスマホの機能のごく一部しか使っていないが、こりゃ便利。とりわけ写真撮影は、それまで最新のデジカメを次々と購入してきたが、今やスマホ 1 台あれば OK だ。そのため、先日には約 30 万円の出費をもたないと思うことなく、iPhone15Pro を注文することに。それも、容量は 256GB、512GB、1TB のうち、最大の 1TB を購入したから、動画撮影のプロと同じくらいの量の写真を撮りまくっても容量は十分だ。これなら、私にだっていろいろな動画を撮影し、SNS にアップすることも十分可能だが・・・。

## ■□■シグネは恋人の高評価をなぜ喜ばないの？それがテーマ■□■

ノルウェーのオスロで、恋人のトーマス（エイリック・セザー）と同棲している女性、シグネ（クリスティン・クヤトゥ・ソープ）は、かなりの美人。現代アーティストとして働いているトーマスが最近、世間の注目を浴びているのは喜ばしいはずだが、カフェのバリスタとして働いているシグネは、それが気に入らないらしい。それは一体なぜ？それが本作のテーマだ。

誰でも“自己愛”があり、“自己顕示欲”がある。さらに、“承認欲求”もあるらしい。SNS でのフォロワー数に固執する人は正にその典型だが、シグネはそれが病的に進んでい

るらしい。本作は冒頭のレストランにおけるシグネの“自己承認欲”の暴走ぶりに注目だが、以降それがさまざまなバージョンで展開されるので、それにも注目！

## ■□■ミュンヒハウゼン症候群とは？“リデクスール”とは？■□■

本作の鑑賞後、ネット情報を調べたところ、「ミュンヒハウゼン症候群」（作為症、虚偽性障害）なるものがあるらしい。これは仮病ではなく、症状を自ら作り出してしまう病気だそうで、シグネはそれかもしれない。

ロシアの抗不安薬たる“リデクスール”という薬を飲むと、その副作用で皮膚疾患が出ることを知ったシグネは、友人のドラッグディーラーに依頼して、これを大量に購入。毎日毎晩飲み続けていると、シグネの期待どおり（？）皮膚に異常が発生し、その症状は顔面にも！美しさに憧れる女性にとって、そんな事態はまさに最悪のはずだが、“承認欲求”の塊のような女・シグネにとっては、これは望ましいことだったからスゴい。早速、シグネはこの症状を最大限活用するべく、SNSを使ってあちこちに働きかけることに・・・。

## ■□■この女は最悪！『わたしは最悪。』の邦題は本作にこそ！■□■

近時、「LGBTQ 理解増進法」についての賛否の議論が活発だ。また、大阪弁護士会に所属する仲岡しゅん弁護士に対する脅迫事件が報道された。これらの件について、私は私なりの意見を持っているが、その表明は控えたい。しかし、私の立場によると、本作のシグネはまさに最悪。そして、それ以上に最悪なのは、リデクスールの大量摂取によって顔面に異常な症状が出たシグネを某モデル会社が採用し、世界的に大ヒットさせたこと。つまり、そんな症状の出たシグネをもてはやすことによって、シグネの自己顕示欲（承認欲求）を満足させるという現実が大問題なのだ。その結果、今やトーマスとシグネの立場（優劣）は入れ替わってしまったが、だから、どうだというの？

デンマーク生まれノルウェー育ちの女性監督ヨアキム・トリアー監督の『わたしは最悪。』（21年）（『シネマ 51』140頁）は、そのタイトルにそぐわないもので、中国のTVドラマ『30女の生きる道』と同じように、面白い映画だった。『わたしは最悪。』というタイトルがふさわしいのは、まさに本作のシグネだ。私は本作のような問題提起自体を否定するものではないが、くれぐれも“ケータイ（スマホ）を持った猿”が大量に増殖している今の時代、シグネのようなバカ女、最悪の女が登場しないことを願いたい。

2023（令和5）年10月20日記